



TITLE:

静脩 Vol. 38 No. 2 (2001.8) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 38 No. 2 (2001.8) [全文]. 静脩 2001, 38(2)

ISSUE DATE:

2001-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66039>

RIGHT:



Seishu The Kyoto University Library Bulletin

静脩

2001年8月

Vol. 38, No. 2

連歌の世界

光田和伸

昔、といっても百年ほど前まで、この国に「連歌」という文芸が盛んに行われていた。一代の名手、宗祇の時代に比類ない水準に達し、貴族や上流武士の必須の教養の一つに挙げられる。しかし明治に入って、それまでの幕府や藩の保護を失うとしだいに廃れて、ほそぼそと国のどこかの片隅で伝承されるというに過ぎなくなった。民衆の間では早くから連歌の簡略版ともいべき「俳諧」(連句と通称する)が愛され、こちらは芭蕉の手によって十七世紀末に「俳諧七部集」(「芭蕉七部集」と通称する)に収められる名作の数々を生み出したものの、正岡子規の「発句鼓吹、俳諧排斥」いらい全くふるわなくなる。

技は絶えても手振りは残る。例えば私たちが使う日本語の表現のうち、「拳句の果て」「付かず離れず」「花を持たせる」などは連歌に始まったか、或いは連歌の力を借りて広がり根づいたものであるといわれる。いや、「動物」「植物」「時分」「夜分」という、ごく当たり前の語彙が、そもそも連歌のなかで整えられ、私たちの常に用いるところとなった。また今日、日本の試験が「百点」であること、その百「点」という呼称、

「採点」という行為、これらはみな連歌という文芸を修得する過程での慣例を準用しているのである。

盛んだったものが、次第にふるわなくなる。例えば、

遊戯の代表であった双六は、奈良時代以降ずっと女性たちの世界を中心に愛されてきたのだが、幕末近くに突然に廃れ、現在では、その遊び方を伝承する者も皆無に等しいという。由緒ある寺社や名家の什物調度の中に、螺鈿の青貝の光も涼しい双六盤の優品を見ることがあるけれども、そこに手が添えられて行き来することは、もう無いのである。双六と同じ運命を連歌もたどるかと思えたのだが、ここ二三十年、まず俳諧(連句)から復興の気運が始まり、十年ほど前からは連歌の作者も増えて、ともに全国規模の大会が毎年盛大に開催されている。連歌は短歌の上の句と下の句、すなわち「五七五」と「七七」を連ねて、連想の発展を楽しむ



遊びである。『万葉集』巻八の例を引けば、

佐保川の 水をせき上げて 植系し田を 尼
刈る早稲は ひとりなるべし 大伴家持

自分が提起した主題を、相手はどのように受けて展開させるか。そこに相手の器量を試す面があり、これは、古く『古事記』に求愛の問答として載せる、

あめつつ ちどりましとと など^さ鯨ける^{とめ}利目
乙女に ^{ただ}直に逢はむと わが鯨ける利目

という旋頭歌（片歌の唱和）の伝統につながると見られる。いま旋頭歌も含め、これらを「連歌形式」の名で一括すると、最も初期の連歌形式は、相手が自分の思いを包んでくれたうえで、更に羽ばたく力をどれほど持っているかを見るためにあった。そこから求愛、求婚のやりとりの晴れの詞の形式として洗練されていったものと思われる。もちろん試されるのは男であるから、前半を歌うのは女ということになる。

旋頭歌（五七七／五七七）と連歌（五七五／七七）とを厳しく区別しようという考え方にはさほど意義がない。この二つは似た役割を担っており、しかも旋頭歌が廃れると並行して連歌が盛んになっている事実は、連歌が内容において旋頭歌の継承形であることを示している。

さて、連歌（五七五／七七）の現存もっとも古い作品は、さきほどの尼と大伴家持の唱和であるが、この例のように短歌形式を唱和によって完成して終わる連歌を「短連歌」と呼び、後世の長く続ける「長連歌」（鎖連歌とも）と区別する。「短連歌」はいつの時代から行われたのだろうか。柿本人麿には旋頭歌のみごとな作例がある。旋頭歌の作例は、その後、数を減らすとともに形骸化してゆくから、人麿没後の遠くない時期に交替があったと考えられる。尼と大伴家持の唱和について、

こうした例は他に認められないから、奈良期末期から平安朝初期にかけて短連歌が広く行われていたとは考えられない。短連歌が流行しはじめたのは、やはり三句切の短歌が優勢になってきた平安期中期以後のことであろう。（木藤才蔵『連歌史論考』）

という説がある。ゆるぎない定説と思われているのだが、私はこれを疑っている。そもそもなぜ「三句切の短歌が平安期中期以後に優勢になってきた」のか、誰も検証していないのだから、それを根拠にものいうことには慎重でなければなるまい。その理由をどこかに求めるなら、新しい短連歌形式の流行が「三句切の短歌」の優勢を招来したと考えるほうが説得的だろう。奈良期末期から平安朝初期にかけて、和歌は最も低調な時期に入っていた。新しい連歌形式が短歌形式を新しくし、『古今和歌集』に連歌風の「複視点的なスタイル」を生んでゆくと考えてみてはどうだろうか。そのほうがはるかに良いだろう。

平家が朝廷に力を蓄え始める十二世紀の中頃、連歌は第二の時代に入る。長連歌、すなわち「五七五／七七」の単位を何度も反復する形式に移行する。勅撰集でいえば第六番の『詞花和歌集』の時代であり、和歌は再び最も低調なマンネリズムの時期に入っていた。前世紀なら和歌に向かっていただろう才能が、連歌に向かう。長連歌は最初から遊びの要素を豊かにもっていた。さまざまな遊び方が試みられる。「賦^{ふし}物」という、特定の限定されたジャンルの語彙を隠して詠みこむ工夫もその一つである。

くるとあくど 詠めもあかぬ 真木の戸に
外山へだつる 宇治の川霧 定家
峯ふかき 雪のこなたは 跡もなし 家隆
（一二一七年庚申連歌）

これは、長句（五七五）に「草」、短句（七七）に「木」の賦物をとっており、「草木連歌」

と呼ばれる。それぞれ、菜（ながめ）、桐（きり）、根深（みねふかき）であり、おそらく、もとは百句を連続して詠んだのであろう。注目すべきは、ここに見られる藤原定家や家隆の熱中ぶりである。ことに定家は、ごく少壮のころから新しい長連歌の形式に耽溺しており、この好尚は生涯変わることがなかった。晩年は殆ど歌をやめて連歌に耽ったとも伝えられる。この定家たちを中心に『新古今和歌集』という歌風の新しい峰が現出することは、ここでも連歌と和歌の関係を推測させて、まことに興味深い。

『古今和歌集』『新古今和歌集』という二つの斬新な歌風が誕生する契機をひそかに提供したと思われる連歌は、これ以後訪れる和歌の沈滞に、三度新風を吹き込むということはなかった。むしろ自身が前面にでて、新しい文芸として光を浴びはじめる。それは定家が世を去ってから百年余りが経過した、十四世紀の半ば過ぎのことである。それには次のような転換点があった。

まず、賦物連歌が様々な賦物を生み出すことによって、語彙をジャンル分けするという習慣が連歌作者の間に根づいたこと。たとえば、賦物には「草木」「魚鳥」「源氏国名」「源氏詞」「名所」など、さまざまなものが登場した。

同時に賦物連歌の窮屈さが、しだいに意識されるようになった。たとえば、草、木、魚、鳥、これらのジャンルの語彙を少なくとも五十以上ずつ知っていなければならない。一度使ったものは通常は再使用できないから、それを一々外していかなければならない。しかも詠むに際しては隠して詠みこむことが要求される。

こうして、「賦物」に代わる、長連歌の新しい原理を探る試みが十三世紀半ばから始まる。新しい原理は次のようなものであった。

- 1 語彙をジャンルに分けて登録する（これだけは賦物連歌の蓄積を踏襲）
- 2 ジャンルごとに、連続して使用してよい句数を別に定める。
- 3 おなじくジャンルごとに、使用し終わった語彙を再使用するまでの待機句数を

別に定める。

- 4 語彙はその意義通りに使用し、隠して詠まない。

例えば「山」のジャンルの単語は三句連続して使用してよく（谷、峰、滝）、終われば五句以上待って再使用できる。これに対し、「人」のジャンルの単語は二句連続して使用してよく（君、我）、終われば二句以上待てば再使用できる。この新しい原理に基づく連歌を「去嫌連歌^{さりきらい}」という。「去嫌連歌」の基本は、それぞれのジャンルごとに語彙の「動き」（連続使用句数と待機句数の組み合わせ）が異なるところにある。これは、このアイデアが、遊戯の一つである将棋に由来していることを示唆している。事実、将棋は十三世紀半ばから、一挙に大衆化してゆく遊びである。

「去嫌連歌」は一三七二年、二條良基の「応安新式」によって大成される。それまで遊びの要素の強かった長連歌は新しい連歌の登場により、ことに二條良基の「応安新式」の完成により、しだいに展開の美を競う文芸の性格を強めてゆく。これは、たとえば戦法の蓄積とともに将棋が芸道となってゆくのと同一現象である。

二條良基による『菟玖波集』（一三五六）宗祇らによる連歌の手本と仰がれる「水無頼三吟」（一四八八）『新撰菟玖波集』（一四九五）など、連歌は実質的に和歌に代わって時代を代表する文芸となる。小人数が閉鎖的な小空間に集まって短い時間で共同制作する「座の文学」と呼ばれる日本特有の文芸のスタイルがここに誕生し、やがて能楽や茶道という新しい芸道の母体となるのである。

京都大学附属図書館、および文学部図書館に多数収蔵されている連歌の名品は、連歌が最も輝き、今日まで変わらぬ日本的思考の原型が誕生した時代の息吹を伝えるとともに、私たちの明日いかにと、問いかけているのであろう。

国際日本文化研究センター・助教授
（みつた かずのぶ）

生物学者からみた図書館の意義

原子炉実験所放射線生命科学・教授

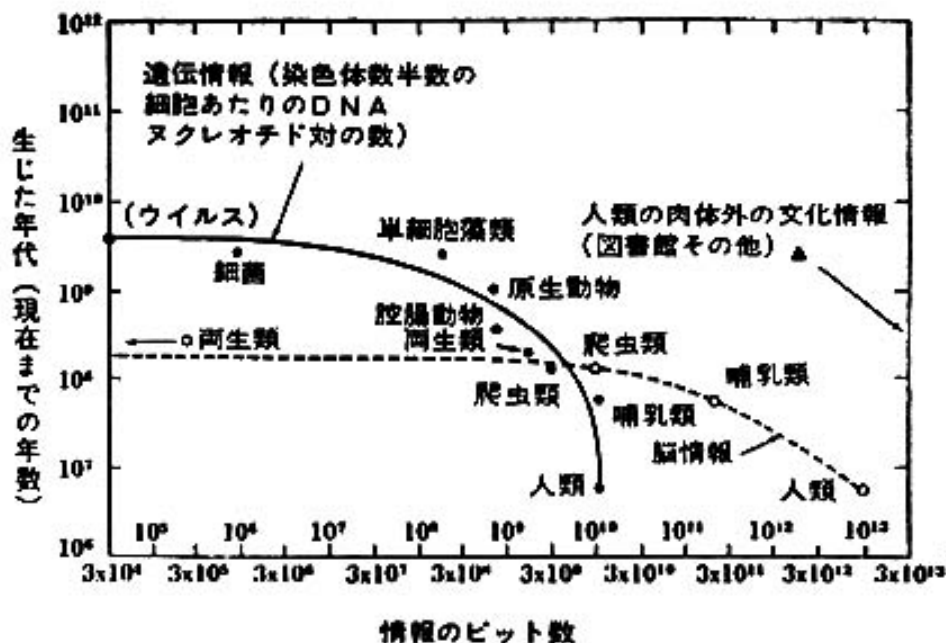
内 海 博 司

最近のヒトゲノム・プロジェクトの結果、思いの外、ヒトゲノムが持つ遺伝子情報は少なく、多くても4~5万であるということが明らかにされた。今は亡きカール・セーガン博士は、この事実を知るよしもなかったが、彼の著「エデンの恐竜 知能の源流を訪ねて」(長野敬訳、秀潤社 1978年)には、地球上の生命の進化において、DNAの遺伝情報や脳(脳情報)がいかに増大したかを、コンピューターのビット数で表し、生命の進化の頂点に人類が立っていること明瞭に示した。この図を私が非常に気に入っているのは、「人類については、もし肉体外の情報を含めるならば(図書館その他) その情報量は、ヒトのゲノムもヒトの脳もはるかにしのぐ大容量である」として人類の肉体外の情報()が示されている点である。

遺伝情報といえ、昨年亡くなられた大野乾博士(「先祖物語」大野乾著、羊土社 2000年)が「ヒトとチンパンジーの遺伝情報はまったく区別



できず、チンパンジーはヒトの近縁でゴリラの遠縁にすぎない。この矛盾に満ちた事実を説明できるようなヒトとチンパンジーとの違いを調べたが、見いだせなかった。唯一見いだしたのが、ヒトはチンパンジーより、頭蓋骨から舌を動かす運動神経系を通す穴が太くなっていたことである。ヒトをヒトたらしめたのは、舌がよ



く廻りだし、言葉をしゃべれるようになったことである」と結論している。

「生命の進化において獲得形質は遺伝しない」という厳然とした事実がある。しかし、言葉をしゃべり、文字を発明したヒトだけが、肉体外の情報（図書館、美術館その他の文化施設）を持つことによって、遺伝情報や脳機能という生物学的な情報容量では、乗り越えることが出来ない進化のハードルをクリアしたと思われる。父親が努力して人間国宝になるような陶芸家（獲得形質）になったとしても、その子供がその獲得形質を遺伝的に受け継ぐことはない（努力する能力や、美的感覚などは受け継ぐかもしれないが）。しかし、父親が獲得したノウハウを、口伝する、文章にして残す、ビデオで残すようなことをすれば、その子供は勿論他人でさえ、人間国宝になるような技術を受け継ぐことができる。

本川達雄博士も「ゾウの時間ネズミの時間」（中央公論社 1992年）で、「現代人という生き物が、他の動物とは質的に違った生き物になっている」という感想が述べられている。本川博士は「全ての生物の標準代謝量は、その体重の $3/4$ 乗に比例する」という経験則を使って、「現代日本人が使っている平均的なエネルギー消費量を体重に換算すると、その体重は4.3トン、つまりゾウのサイズである」ということ、「生き物の生息密度は食糧確保の関係から大きさと関係しているが、日本の人口密度は、体のサイズ（60キログラム）から期待される密度の230倍でギョウギョウ詰めの暮らしをしている。逆に、この密度で生活している動物に換算すると、体重140グラムのネズミくらいの動物となる」という例を引いて、ヒトは質的に他の動物とは違った生き物（私に言わせれば「化け物」）であるという結論を出している。

しかし、言葉をしゃべれることでヒトが化け物になったのではなく、文字を発明した後、ヒトは化け物になったと私は考えている。最近「銃・病原菌・鉄」（倉骨彰訳、草思社 2000年）

でピュリッツァー賞/コスモス国際賞を受賞したジェレド・ダイヤモンド博士が、現在も文字を持たないニューギニアなどの先住民の人々が、老人たちを非常に尊敬し大切にしているという興味ある報告を「ネイチャ」誌に寄稿した（Jared Diamond, Unwritten knowledge. *Nature*, vol.410, 521p, 2001）。文字を持たない人々は、肉体外に知恵の宝庫（図書館）を持ってないが故に、年取った人たちを、危機を乗り切る知恵袋、知恵の伝承者として処遇している。例えば、歯を全て失っている老人たちは食べられないので、その子供たちが食べ物を咀嚼して柔らかくした後、供するという徹底したお世話の仕方である。

一方、文字を発明した化け物たちが造る文明社会で、老人たちが受けている仕打ちはどうであろう。情報を絞り出されたゴミが滓のように扱われていないであろうか。若者たちが得る、人を直接介さない無味乾燥な情報が、人間くささ（生き物らしさ）を失わせてしまうのかも知れない。文字を持たない人たちの「口伝」という人間くささを通じた情報によってのみ、ヒトは化け物でない生き物として、生きていけるのであろうか。人が咀嚼した形の情報として伝えるシステムは、まさに教育そのものである。この教育システムがうまく機能していないことの現れかも知れない。未来の図書館には、この人間くさい機能を取り込む工夫をして欲しいものである。

先人たちの言葉を借りるまでもなく、図書館が教育/研究の場において必要不可欠であることは云うまでもない。しかし、図書や図書館を大事に思い、十分な資金が提供されているかと云えば、本当に情けない現実がある。一方、ヒトの人生の短さ故に、人類が蓄えた情報を十分利用できなくなろうとしている。一日に2冊の本を読み続けても一年間で、たったの730冊、これを一生（100年？）続けたとしても、7万冊をちょっと超えるにすぎない。どうやって良書を選ぶのか、どうやれば必要な情報を確実に取

り出せるのか。これまでのように本を並べ積み上げただけでは図書館ではなく、情報をどのように整理し、簡単に検索できるようにして、必要とする情報を直ぐ取り出せるようなシステム自体が、未来の図書館であろう。しかも、それが人間くささのある情報として提供されれば、願ってもないことである。

ヒトは、自分たちを産み育ててくれた地球とその仲間たちとは異なった生き物に進化してしまっていることを認識して、ヒトをヒトにならしめた人体外の情報（図書館）を身につけなければ、まさにヒトの形をしたモンスターそのものに成り下がるであろう。

最近、京都大学附属図書館のお陰で、欧米の大学図書館のあり方を、視察する貴重な機会を得た。日本の大学図書館の図書館員は司書を含めて事務系に属し、本の選定や予算作成などは大学の教官（faculty member）が行っている。欧米では、全て図書館員（librarian）が行っており、修士や博士の学位をもっている専門的な図書館員もいて、情報を整理し、提供している。知恵の殿堂に紛れ込んだ闖入者にも、図書館員が適切なアドバイスを返してくるシステムを作り上げている。いかに図書館が教育/研究の場で必要不可欠であると認識されているかは、その総合図書館長の地位が、教官でないにも関わらず学部長より上であることが、雄弁に物語っている。大学教官の関わりは、良くてアドバイ

ザー、多くは、このような本を図書館に備えて欲しいと云うお願いをするだけである。大学教官が教育や研究の片手間に、図書の選定や図書館運営に関われないほど、毎日膨大な図書が生まれ、電子図書など異質の情報が世界中に溢れている現状がある。

情報化社会への移行でさえ遅れている日本は、早急に旧態依然とした図書館システムを改善しなければ、本当に大学の教育・研究自体が世界から取り残される恐れがある。特に、最近の電子ジャーナルの普及において、商業主義に乗った出版社/取り扱い業者が、情報を欲しがる大学人の弱みにつけ込んで、法律すれすれの取引を行っている。最初はタダで電子ジャーナルを利用させ、そのすばらしさにドップリ浸からせた後、この悦楽をむさぼるためには法外な料金を要求するという、あくどい商売が横行している。欧米の図書館を視察して、多くの大学が同様な悩みで困惑している事実を痛感した。

多くの官公立大学を持つイギリスでは、電子ジャーナル/学術雑誌の契約には国として対応していることを知った。同様な事情にある我が国は、税金の無駄遣いにならないよう、当然イギリスと同様、国レベルで対応すべきことであろう。大学が独立法人化する前に、解決して欲しい課題である。

（うつみ ひろし）

北米大学図書館訪問記（１） 電子ジャーナル編

総合人間学部整理掛 富岡達治

1. はじめに

私は、2000年10月13日から2週間、「平成12年度京都大学教育研究振興財団助成金第1類第1種（派遣）」の助成で、北米の大学図書館へ研修派遣の機会を得ました。

訪問した図書館はトロント大学、ピッツバーグ大学、Northern Regional Library Facility（カリフォルニア大学）、Southern Regional Library Facility（同上）、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校ですが、今回は、電子ジャーナルを主たるテーマとして、トロント大学とピッツバーグ大学について報告したいと思います。

2. 目的

当時、私は附属図書館情報管理課受入掛において、外国雑誌の受入業務を担当していました。その中で、多くの比重を占めるようになった業務が、電子ジャーナルでした。しかし、図書館資料としての歴史は浅いため、どのように取り扱えばよいのか、手探りの状況でした。そのため、電子ジャーナルのような電子的資料について、海外の図書館ではどのように取り扱っているのか、とても興味がありました。

また、電子ジャーナルのような、ネットワークを利用して入手できる電子的資料が増えてきたといっても、従来型の図書館資料を見過ごすわけにはいきません。いわゆる「本」の形態をとる資料は、なくなるわけではなく、むしろ増える一方です。しかし、すでに狭隘化した現在の施設にはそれらを収容する能力はなく、一刻も早い「保存図書館」の確立が望まれています。そこで、従来型の「本」と電子ジャーナルのような資料を海外の図書館ではどのように管理し、提供しているのかを考察することにしました。

3. トロント大学（University of Toronto）

カナダ南東部に位置するトロント（City of Toronto）は、20世紀半ばから急速な発展をとげたカナダの金融と文化の中心地です。「トロント」とは先住民族インディアン言葉で「人々が出会う場所」という意味ですが、政府の積極的な移民政策の結果、非常に多民族となった都市はまさに「トロント」とであると言えます。

トロント大学は、1827年創設のキングス・カレッジを前身とするカナダ随一の大規模大学です。1897年に創設された京都大学より70年も早く出発しています。キャンパスは、メインとなるセント・ジョージの他に、東のスカボロー、西のエリンデールの3ヶ所があります。セント・ジョージ・キャンパスは、トロント市街のほぼ中心に位置し、石造りの重厚なゴシック建築から近代的なビルまで、広大な敷地に立ち並びます。ちょうど、紅葉が始まった時期でもあり、まるで映画のような景色は今でも印象深く残っています。



ロバーツ図書館（トロント大学）

3.1. ロバーツ図書館 (Roberts Library)

トロント大学には大小合わせて40余りの図書館があり、中央図書館にあたるロバーツ図書館は600万冊の蔵書を誇ります。この建物は三角柱の変わった形状をしており、ガイドマップ上でもひときわ目を引くものでした。これは、カナダのシンボルである楓(かえで)の葉をあらわしているとのこと。実際にその前に立つと、その巨大な姿に圧倒させられました。

ロバーツ図書館の1階部分は、銀行であるScotiabankが出資した「Information Commons」という情報スペースがあり、端末、プリンター、スキャナ等が開放されています。端末は、立ったまま利用できるものと、座って長時間利用できるものとが用意されていました。さらに、ヘルプデスクでは、個人所有のコンピュータ用に、必要なソフトウェアを収納したCD-ROMをスターター・パッケージとして無料で配布しています。

図書館利用証は、「TCard」と呼び、学生証、職員証と一体化されています。TCardの発行と同時に電子メールアカウントも発行されます。また、このカードにはICチップが埋め込まれており、入金可能なプリペイドカードとして、コピー機やプリンター、さらに、大学内の自動販売機の使用もできます。ちょうど京都大学で学生証・職員証を磁気カード化するという時期でもありましたので、この機能的なカードには非常に魅力を感じました。

3.2. 電子ジャーナルについて

トロント大学図書館では200タイトルほどからスタートした電子ジャーナルですが、2001年7月末時点で有料・無料を含めて約14,000タイトルが提供されています(複数サービスによる重複含む)。スタート当時はそれほど利用はされなかったようですが、トロント大学図書館では、この状態を提供したタイトル数が少ないためと分析し、より多くのタイトルを提供したところ、利用が増加していったとのことでした。

前述の3つのキャンパスは、セント・ジョージ・キャンパスを中心として、東西にそれぞれ15kmほど離れていますが、電子ジャーナルの契約は、基本的に1サイトとして契約するように、出版社と交渉しています。これは、トロント大学の最高意思決定者である学長(President)は1人であり、財政基盤も1つであることに基づいています。日本で、欧米特にアメリカの出版社と話し合う場合、「サイト」の定義に、お互いの理解のズレをよく感じます。トロント大学での事例は、同様に複数のキャンパスを抱える日本の大学にとって、非常に参考になると考えます。

また、電子ジャーナルをはじめとする電子的資料の選定はEIRC(Electronic Information Resources Committee)によって行われています。EIRCでは新たな電子的資料の選定とともに、その購入資金を確保するため、中止対象資料の選定も行っています。昨年は、すでに電子的資料で提供されている冊子体の索引・抄録誌について検討し、中止のためのガイドラインを策定したとのこと。

4. ピッツバーグ大学(University of Pittsburgh)

かつて鉄鋼の町として栄えたピッツバーグですが、現在はハイテク産業、教育、医療の中心地として発展し、アメリカで最も住みやすい町(Most Livable City)にも選ばれました。

ピッツバーグ大学は、1789年創立の州立大学で、ダウンタウンの東部、オークランド地区に位置します。この地区にはピッツバーグ大学の他にもカーネギー・メロン大学や博物館、美術館、図書館などが建ち並んでいます。キャンパスと町との境界はほとんどなく、町全体が大学という印象を受けました。

ひときわ目を引いてそびえ立つカテドラル・オブ・ラーニング(学問の大聖堂)には、ナショナルリティ・ルームズと呼ばれる各国の特徴を凝縮した教室が並んでいます。日本ルームには、床の間や掛け軸、障子などがあり、少し違和感

があったものの、心が和まされました。これらの教室は実際に授業で使用されており、フランスルームのように豪華絢爛な教室で受ける授業はどんなものだろうと、想像したりもしました。



ヒルマン図書館（ピッツバーグ大学）

4.1. ヒルマン図書館（Hillman Library）

ヒルマン図書館は、ピッツバーグ大学の中央図書館で、人文・社会科学系資料を蔵書の中心としています。

「Historic Pittsburgh」は、ピッツバーグに関する資料の電子化プロジェクトで、1998年に開始されました。このプロジェクトでは、1920年代以前に出版されたピッツバーグに関する資料や地図、人口調査などを電子化して提供しています。

また、電子化だけではなく、資料の保存という点にも熱心で、ヒルマン図書館の資料保存部門（Preservation Department）では、紙質が悪く、劣化した、または劣化するであろう資料の脱酸処理やマイクロ化などを行っています。脱酸処理装置も設置され、少量であれば自前で処理するとのことでした。1999年からは、人文科学基金（National Endowment for the Humanities）から219,000ドルの助成を受け、ポリビア資料コレクションのマイクロ化も行っています。これらは、ポリビア独立戦争やポリビア革命、言語、文化にわたる、非常に広範なコレクションです。仕上がったマイクロフィルムは、1本ずつ解像度や濃度をチェックし、品質管理の徹底

ぶりを窺い知ることができました。

4.2. 電子ジャーナルについて

ピッツバーグ大学では、現在、4,400タイトルの電子ジャーナルを提供しています。新規に導入する場合、NRWG（Networked Resources Working Group）での協議を経ます。NRWGの構成は、図書館の管理職をはじめレファレンス・ライブラリアン、システム関係者などです。また、NRWGでは電子ジャーナルだけではなく、CD-ROM等も含めたネットワーク資料全般を検討します。

検討過程は非常にシステム化されており、新規に購入を希望するものがあれば、Web上に用意された専用のフォームで申し込みます。記入する主な項目は、以下のようなものがあります。

- 商品名
- スタンドアロンかネットワークか
- 買い切りか購読（Subscription）か
- メディアは何か（CD-ROM、WWWなど）
- 必要システム
- URL
- 収録範囲
- デモやトライアル期間の有無
- デモやトライアルのフィードバックの有無（利用統計など）
- 利用対象者
- 提供内容（フルテキスト、コンテンツなど）
- 同時ユーザ数や機能数の制限があるか
- 価格（初期費用、ネットワーク料金等も含む）
- 支払方法等
- 他の商品とのパッケージ購入が必要か
- License Agreement（のURL）

検討の流れは図のようになります。ここで、興味深かったことは、ライセンス・レビューの過程で、出版社との交渉は大学の法務部門で行われることでした。また、処理状態もWebで公開され、自分が申し込んだ資料についての検討経過を確認できるようになっています。

5. おわりに

京都大学では、雑誌の選定や購入は「調整された分散主義」のもと、各部局で行って来ました。電子ジャーナルも同様で、当初、電子ジャーナルの利用は冊子購読者に与えられた特権、あるいは冊子のおまけといった認識が強く、あくまでも購読者（部局）単位の利用が主だったように思います。

しかし、最近では冊子の購読がベースであっても、京都大学全体で対応しなければならないケースが増えてきており、雑誌の選定および購入経費の確保を部局に任せている現状では、部局間の障壁が大きな課題となっています。

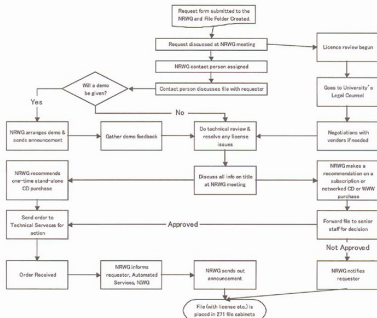
昨年度から行っている外国雑誌の重複調整で、全学的共同提供・利用体制への第一歩を踏み出すことができました。しかし、その財政的基盤は非常に不安定で、継続的・安定的運用のため共通経費の確保が望まれます。

今回、海外の大学図書館を見学し、大学全体の研究情報の流通する基盤を整備する必要性をあらためて痛感しました。

次回は、カリフォルニアでの保存図書館について、報告します。

（とみおか たつじ）

図. NRW の処理フロー



附属図書館利用統計（平成12年度）

利用対象者数

1. 学内教職員・学生数 28,386人（平成12年5月1日現在）

2. 登録者総数 30,673人（平成12年5月1日現在）

内訳

教 官	3,518人
院 生	7,986人
学 生	13,941人
その他	5,228人

その他には職員、卒業生、生協職員、スタンフォード日本センター学生、放送大学生等を含む。

3. 利用証発行枚数（平成12年度） 8,959人

新規交付	6,850枚	（うち放送大学生は354枚）
再交付	2,109枚	

再交付とは、紛失・有効期限切れ・転部・改姓等をいう

入館利用状況

1. 年間入館者総数 780,102人

内訳

学 内	入館機	770,676
	マニュアル*	3,931
学 外	閲覧**	4,747
	見学	748

（人）

* マニュアル：忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者

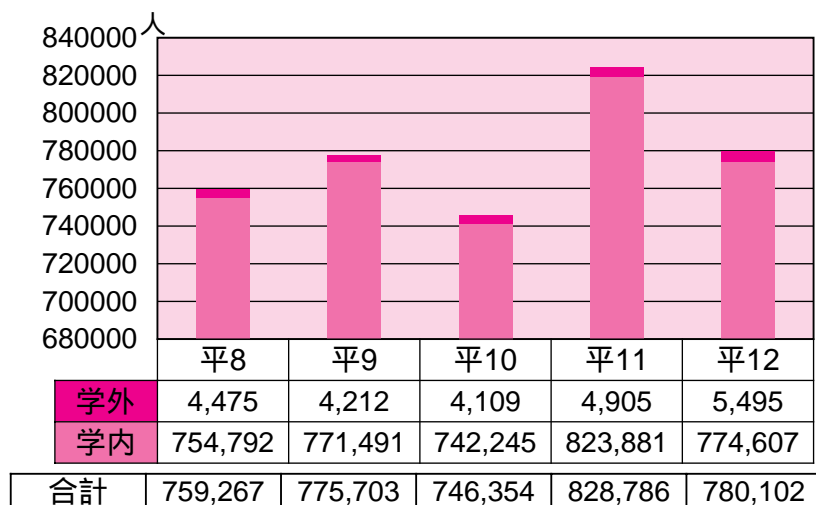
** 閲覧：学外者の特別閲覧願手続きによる入館者と共通閲覧証による入館者

入館機による入館者 770,676人について

開館日 1 日当たり	2,557
平日 1 日当たり	3,575
土・日曜日 1 日当たり	1,300

（人）

2. 入館者総数5年間推移



資料利用状況

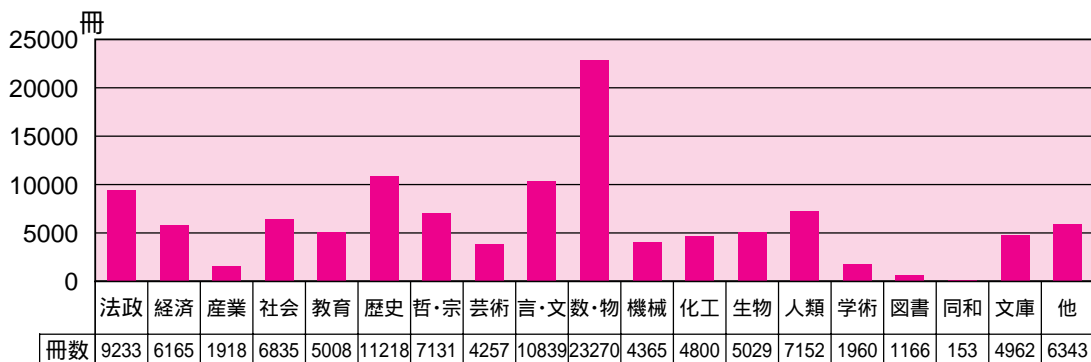
1. 普通図書貸出利用状況

年間利用冊数	122,704冊
年間利用人数	66,220人

2. 学内者への貸出

	平成12年度	平成11年度
年間貸出冊数	121,804冊	125,706冊
年間貸出人数	65,871人	67,376人
1日平均貸出冊数	399冊	409冊
1人当たり貸出冊数	1.8冊	1.9冊
年間貸出冊数最高日	12月22日(1,181冊)	1月17日(1,050冊)

3. 分類別貸出状況



4. 貴重書利用状況

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1. 和貴重書	801冊
2. 河合文庫	461冊
3. 中院家本	280冊
4. 富士川文庫	222冊
5. 平松家本	131冊

参考業務

文献調査 国内

1. 受付件数

		平成12年度(件)	平成11年度(件)
内容	所蔵調査	5,900	6,826
	事項調査	398	476
	その他	4,033	3,672
	合計	10,331	10,974
形式	FAX(文書を含む)	2,376	2,893
	電話	2,760	2,576
	カウンター	5,195	5,505
	合計	10,331	10,974

2. 依頼件数

		平成12年度(件)	平成11年度(件)
内容	所蔵調査	295	288
	事項調査	20	26
	合計	315	314
形式	FAX(文書を含む)	315	314

3. 機関別受付・依頼件数(ただしFAX・文書に限る)

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	85	
国立大学	328	143
公立大学	152	11
私立大学	1,306	111
国立共同利用期間	10	1
公共図書館等	111	20
非営利団体	35	14
一般企業	58	1
個人	290	
国立国会図書館	1	14
合計	2,376	315

4 学内者・学外者別利用件数

学 内 者	5,742
学 外 者	4,589
合 計	10,331 (件)

相互利用

1. 他大学図書館訪問利用

	平成12年度(件)	平成11年度(件)
発 行 件 数	2,549	1,664

内訳:		発 行	受 付
	共通閲覧証	389	
	資料利用願	1,160	
	特別利用願	0	

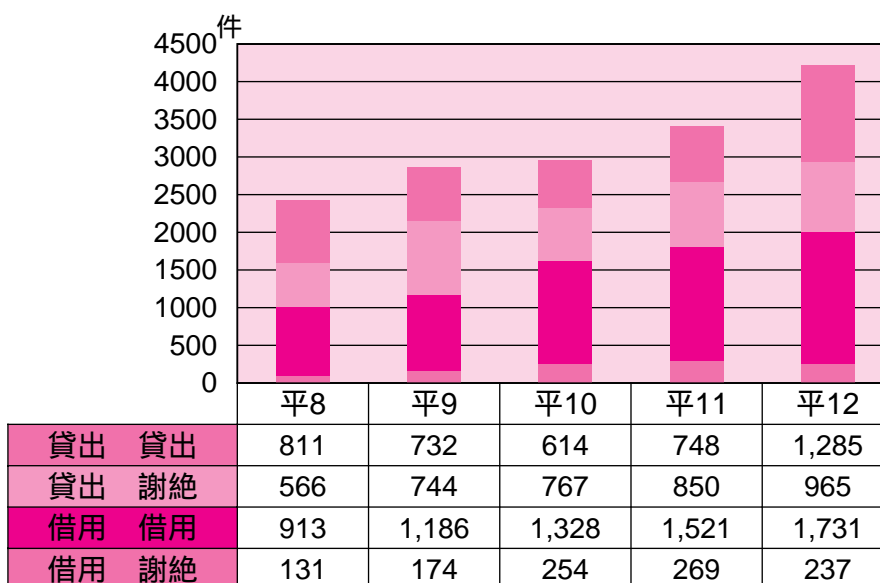
(件)

共通閲覧証: 国立大学間共通閲覧証

特別利用願: 国立大学附属図書館間夏季休業中の特別利用願(平成12年度より廃止)

2. 現物貸借

現物貸借5年間推移



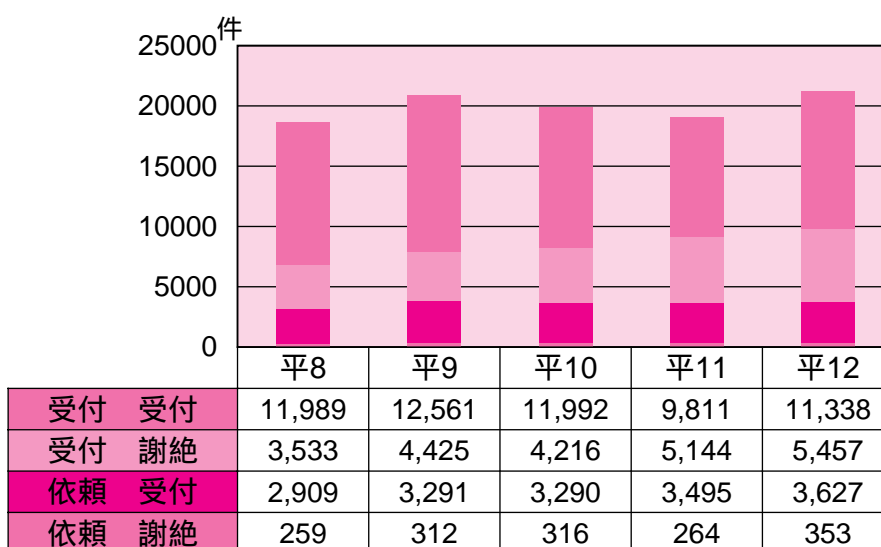
3. 文献複写

		平成12年度(件)	平成11年度(件)
依 頼	頼 付	5,048	4,482
受 付	付 計	19,657	18,017
合 計	計	24,705	22,499

内訳

		国 外	国 内	学 内	合 計
依 頼	頼 付	184	3,980	884	5,048
受 付	付 計	18	16,795	2,844	19,657
合 計	計	202	20,775	3,728	24,705

文献複写（国内）5年間推移



物理工学系図書室へのお誘い

物理工学系図書室 小 泉 淳 子

物理工学系図書室をご存じでしょうか？機械系工学三専攻（機械・精密・機械物理）の機械系図書室、材料工学専攻図書室、原子核工学専攻図書室の3図書室が2000年4月に統合した新築物理系校舎の一角にある工学研究科・工学部等図書室のひとつです。

物理系校舎は、本部構内東南に位置し、2棟の8階建て研究棟と3階建ての共通棟からなっています。共通棟の講義室では学部生の講義が行われます。その南端3階建ての東側部分が物理工学系図書室です。地下～3階の層に分かれていて、出入り口は1階のみ、各階へは図書室内の階段で移動します。閲覧席および参考図書類・一般貸出図書は2階・3階、地下には雑誌のバックナンバーや古い図書などを配架しています。1階には、新着雑誌を集中配架、また情報検索コーナーを設けています。

入口には不正持ちだしを防止するブックディテクション、カウンターの左に図書自動貸出返却機(ABC-II)があります。ABC-IIは、各自が画面の指示に従い操作することにより図書の貸出・返却を自動で行う機械です。導入する段階では、貸出冊数から貸出を自動化する必要があるか疑問視されましたが、図書室が物理系校舎の一角という地理的条件から学部生の大幅な利用増が見込まれること、機械化できる業務は機械にまかせ、しかもこれを単なる合理化と捉えるのではなく新しいサービスのひとつとして提供する、などから導入することになりました。学生の評判は上々で、ワースグイとか言いながら嬉々として操作しています。導入後1年半経過した現在、トラブルも減少しほとんど職員を煩わすことなく順調に稼働しています。もっともこのABC-IIを利用できない図書もあり、完全に

閲覧業務の人員が不要というわけにはまいりません。昨年度の統計では、全貸出冊数の78%がABC-IIで貸し出され、残り28%が未対応図書・教官長期貸出図書(専用図書)・雑誌の一時帯出・機械トラブル時のマニュアル貸出です。統合前の図書室所蔵の古い図書が未対応図書となっています。これをABC-IIに対応できるように遡及入力することが当面の課題のひとつです。

近年インターネットや電子メディアの急速な進展により、図書室を取り巻く環境が大きく変化してきています。OPACの利用が一般化し、学術雑誌の電子メディアへの移行が確実に進み電子図書館でフルテキストが閲覧できます。ネットワークを含む広範な情報源を使って情報ニーズを満たす情報の提供が求められています。一方では、印刷メディアも学術研究上重要な情報メディアとして存在し、収集対象資料でありつづけます。学術雑誌を購入して保存し利用に供する必要もあります。小規模の物理工学系図書室も例外ではなく、今やこの両方の要求を満たさなければなりません。

いろいろ課題をかかえている物理工学系図書室ですが、皆様に気持ちよくご利用いただけるよう心がけています。是非一度お越しいただき、図書自動貸出返却機をご体験下さい。

夏休みに入り閲覧席満杯の状態から開放され、ほっと一息ついている今日この頃です。

(こいずみ あつこ)



展示会を終えて

附属図書館では、平成13年6月1日から6月30日までの期間、京都大学総合博物館において同総合博物館開館記念協賛企画展「近世の京都図と世界図 - 大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図 - 」として恒例の展示会を開催しました。

今回展示した資料は、平成12年度に附属図書館が寄贈を受けた、大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図の中から、あわせて80余点を展示しました。

大塚京都図コレクションは、近世における刊行京都図の唯一の体系的なコレクションであり、単に市街の変化を伝えるにとどまらない。市街のみを表した地図から洛外を広く含む地図へと変化しつつ、刊行地図として正確を強め、さらに墨刷りから手彩色を経て色刷りへ、また木版から銅版へと、技術的に展開する地図出版の様相をも如実に示しています。このコレクションによって、近世都市図の世界を渉猟して地図出版の展開をたどり、また居ながらにして近世京都の各時期の市街と洛外の名所に遊ぶことができます。

一方、宮崎市定氏旧蔵地図は、主としてヨーロッパで刊行された地図からなり、しだいに精度を増す世界図によって、ヨーロッパにおける地理的知識の増大と世界観の変化をたどることができます。

展示会期間中は、連日盛況で入館者数は六千百人を越えており、展示室では日頃あまり目にすることのできない資料に、入館者は熱心に見入っていました。

また、この間、6月12日には、本学文学研究科金田教授による記念講演「近世京都図の特性」が開催され、一般市民ならびに教職員・学生等で会場は満席、補助席を用意するほどの盛会な講演会となりました。

今回の展示会は、例年実施してきた附属図書館の展示室ではなく、総合博物館の展示室で開催しました。総合博物館のご厚意とご協力により、今回の展示会を開催することができましたことを、この場を借りまして厚くお礼申し上げます。また、文学研究科の金田教授、杉山教授、吉川助教授、総合博物館の山村助手、並びに、礪波本学名誉教授、應地本学名誉教授の皆様にはひとかたならぬご指導、ご援助をいただき厚くお礼申し上げます。

今後も、附属図書館では京都大学が所蔵する貴重な資料をできるだけ多くの方々に観ていただく展示会を引き続き開催していきたいと考えています。



..... 図書館の動き

- 5月10日 SciFinder説明会（附属図書館スタッフラウンジ）
16日 SciFinder利用者説明会（～18日、附図・宇治分館・薬図）
21日 ハワイ大学日本関係コレクション司書 山本登紀子さん来館
23日 附属図書館商議会（平成13年度第1回）
附属図書館商議会電子図書館専門委員会（平成13年度第1回）
SciFinderトライアル開始（～6月22日）
29日 平成13年度国立大学附属図書館事務部課長会議（於：東京医科歯科大学）
附属図書館商議会外国雑誌問題検討専門委員会（平成13年度第1回）
30日 国立大学図書館協議会常務理事会（平成12年度第2回）（於：東京大学）
ハ - バ - ド大学ライシャワ - 研究所 坂口和子さん来館
総合博物館竣工式
31日 国立大学図書館協議会理事会（平成12年度第4回）（於：東京大学）
国立大学図書館協議会図書館電子化システム特別委員会（平成12年度第2回）
（於：東京大学）
6月 1日 企画展「近世の京都図と世界図」開催（～30日、総合博物館展示室）
N I I と国立大学図書館との業務連絡会（於：東京大学）
5日 ハ - バ - ド大学イエンチン図書館 マクヴェイ山田久仁子さん来館
7日 近畿地区国公立大学図書館協議会総会（於：兵庫県立看護大学）
ヴァ - ジニア大学日本語教育プログラムコ - デイネ - タ - 来館
8日 全学図書系事務連絡会議
12日 企画展記念講演会「近世京都図の特性」（金田章裕文学研究科教授）
14日 京都大学図書館システムの在り方に関する検討委員会（第3回）
26日 大阪府立大学総合情報センタ - 3名来館
27日 国立大学図書館協議会総会（～28日、於：北海道大学）
京都図書館大会実行委員会（於：京都府立図書館）
29日 科学技術振興事業団台湾関係者 10名来館
7月 2日 目録システム地域講習会（～4日）
5日 I L L システム地域講習会（～6日）
6日 国公立大学図書館協力委員会
13日 平成13年度第1回選書分担商議員会議
平成13年度第2回商議会
17日 宇治分館運営委員会
全学図書系事務連絡会議
18日 京大記者クラブが附属図書館見学

第48回国立大学図書館協議会総会の報告

平成13年6月27日、28日の両日、北海道大学学術交流会館において標記総会が開催された。初日の全体会議では協議会の中に置かれた各委員会の前年度活動等の報告があり、今年度事業計画や文部科学大臣等への要望書等が協議され、了承された。

この結果、今年度の要望書は「大学図書館機能の高度情報化に向けて」というテーマの下に、学術研究デジタルコンテンツの整備、資料共同利用センター(仮称)の整備、学術図書総合目録データベースの整備、図書館業務合理化経費の増額、学生用図書購入費の増額、等が盛り込まれた。

また、本学は同協議会の副会長館に選ばれたほか、今年度から新しく発足した「図書館高度情報化特別委員会」の委員長館としての任に当たることとなった。

続いて、第1・第2分科会が合同で行われ、大学の管理運営体制における館長の位置づけと役割、電子ジャーナルの導入、学内情報関連施設間における連携強化、間接経費と図書館予算の在り方について活発な意見交換が行われた。

二日目は若手館員による事例報告や平成12年度海外派遣報告が行われたが、内容的にレベルが高く、参加者である館長・部課長からは新鮮な知識が得られたという感想が多く寄せられた。(これらの報告は、後日「大学図書館研究」等で発表予定) なお、懇親会では国立大学を取り巻く環境の激変に関し、真剣な議論や情報交換があちこちでみられ、例年になく活発な談話となったのが特徴的であった。

講演会のお知らせ

(平成13年度近畿地区国公立大学図書館協議会第1回講演会)
「古文献資料解題」

講師 礪波 護(京都大学名誉教授)

演題 宮崎市定コレクション「西洋刊の地理書と古地図」

講師 森 洋久(国際日本文化研究センター 助教授)

演題 歴史地理情報基盤の構築について

日時:平成13年9月21日(金) 13:30~16:30

会場:京都大学附属図書館 AVホール(3階)

第10回京都図書館大会のお知らせ

「21世紀の図書館像を探る ~part II~」

21世紀に入りIT革命を背景に図書館を取り巻く環境は大きく様変わりしてきており、社会の変化は図書館活動のあらたな発展・展開をいっそう可能にしている。

記念すべき10回大会を迎え、今までの蓄積の上になって図書館の館種を超えた幅広い関係者が相集い、21世紀の図書館の役割や方向性を探っていきたい。

1. 日時 平成13年9月12日(水) 10時受付 10時半~16時40分

2. 会場 京都府立図書館 3階

3. 日程 特別報告 「21世紀の図書館像を探る」

報告 「ITと図書館」

報告 「総合学習と図書館」

目 次

連歌の世界	1
生物学者からみた図書館の意義	4
北米大学図書館訪問記（１）	7
附属図書館利用統計（平成１２年度）	11
物理工学系図書室へのお誘い	16
展示会を終えて	17
図書館の動き	18
第48回国立大学図書館協議会総会の報告	19
講演会のお知らせ	19
第10回京都図書館大会のお知らせ	19
目次	20
お詫び	20
編集後記	20

お 詫 び

静脩第38巻1号の記事に誤りがありましたので、お詫び申し上げます。

頁 等	誤 り	訂 正
10 p 上から19行目	福島美智子	福島美知子
10 p 上から23行目	淵上 光昭	淵上 光明

編集後記

この夏は猛暑というか、炎暑という言葉がぴったりのような気候が続いています。京都の暑さも格別です。でもその中でこそ、一陣の涼風がさわやかに感じられるものです。静脩がそんなふうに取り取ってもらえれば素敵だなと思うのですが。図書館を取り巻く情勢は、電子ジャーナル契約の件を取り上げても簡単に解決しない問題が山積みです。11月末には国大図協シンポジウム（西地区）が京大で開催されます。熱い討議が交わされることを期待し、この暑い夏を乗り切っていきましょう。（Ｃ）